ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

金は輝きを失ったか
（低迷を続ける金価格）

９５年４月初め、円が恐るべき勢いで値を上げていた。仕事場のマーケットボードを見つめていた私の胸は高鳴った。たった１ヵ月で１０円跳ね上がって、遂に１ドルは９０円を切ってきた。

「一体何処まで行くんだ」「何でこんなに円高なんだ」市場に渦巻く喧騒の中で、前年幾人かの人に送った私信の中で１ドル８０円迄円高は進むと公言していた私も、実際それが現実化してくると不安にかられた。「これは行き過ぎだ」「いや、もっと円高だ」交錯する見解の前でなす術もなくボードを見つめるしかなかった。結果はご存知のように９５年４月１９日、瞬間的に８０円を切って歴史的円高局面は終わった。

その時私は５月末を以って退職することが決まっていた。勿論そのことを知っている人は上司を除いて誰もいなかった。私はある行動に出た。定期預金を崩して銀行の窓口で金の現物を買ったのである。たった数キロであったが、私にとっては大きな行動だった。円高はもっと進むかも知れないがいずれ終わる。とすれば円ベースでの金価格は今が底でこれから上がって行く可能性が高い、そう読んだのだ。

金販売のセクションに購入の申込みをした私を、旧知の担当者は何故だという顔をした。預金取崩しに疑問を持ったのだろう。私は彼に「自分の相場観を試すんだ」と説明して金の現物を受取った。１本１kgの延べ板は手に取るとズッシリ重かった。その重い現物を抱えたまま私は銀行を退職した。今でも良く覚えているが、私の買値は１ｇ１，１００円強であった。

その後想定通り為替は円安に転化し、つれて金価格も上昇していった。１年も経たない内に１ｇ１，４００円を超えてきて私は内心にんまりしていた。しかし無言で「どうだ」と胸を張った時が金価格のピークだった。再び金はずるずると値を下げて行った。結局下げの過程で別けて処分し損をしない程度で私の金投資は終わった。その金が今１ｇ９５０円を割っている。９５年の歴史的円高局面より更に低い水準にあるのだ。

何故金は価格を下げ続けているのだろうか。この事実は一体何を意味するのだろうか。金はかつての輝きを失ったのだろうか。おそらく同じような疑問を抱いている人も多いに違いない。私如きにそれを解明する能力などはないが、それでもチャレンジしたいテーマではある。

私のノートから円ドル両方の金価格推移を表にしてみる。　（ＮＹ金は先物）

時期	１ｇ（東京）	１オンス（ＮＹ）
９３年平均	1,312 円	359.9 ドル
９４年平均	1,296 円	384.0 ドル
９５年平均	1,193 円	384.5 ドル
９６年末	1,393 円	369.2 ドル
９７年末	1,276 円	296.0 ドル
９８年末	1,101 円	287.5 ドル
９９年末	980 円	291.5 ドル
一昨日	942 円	268.3 ドル

これによると、金価格はドルベースでは９６年頃まで安定していた。従って、東京の金価格が下落したのは明らかに円高の影響と見ることが出来る。金価格が変調しだしたのは９７年である。以降金は３００ドルを割りつづけ、最近では２７０ドルを割ってきた。８８年当時５００ドルを付けた頃と隔世の感がする。当然ながら円ベースでも１，０００円割れが恒常化している。

採掘技術の向上による金産出量の増大、金を使ったデリバティブの発達、など需給をめぐる要因が金価格に影響を及ぼしているのは間違いないとしても、最も大きな影響は政府の保有する金の大量放出であろう。かつて通貨発行の信用を裏付けると共に、危機に瀕した時の備えとしての金保有がその地位を失いつつある。金と紙幣通貨との連動性が薄れ、今や金は巨額の保通コストがかかる上に、保有しているだけでは一銭も稼がない塊に過ぎなくなってしまった。であれば売却して資金化し負債を削減するなり別途運用した方が利口だ。おそらく政府による保有金の圧縮削減の裏には、そうした思考があるのではないのか。果たして金は、単に輝ける塊に過ぎない存在になってしまったのであろうか。

ここまで来て、私はどう結論を出して良いか判らなくなってしまった。世界の主要通貨がその価値を担保するものがない状態で永遠に上手く行くとは思えないし、しかし若しかしたら時代が変わってしまったという思いが交錯してこの貧困な頭が揺れる。金は何処へ行くのだろうか。

TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
E-mail smc_toyo@hi-ho. ne. jp
《転載・複製等は連絡下さい》